比喩の説明は、もっと広範な問題、すなわち全体として捉えられた作品そのものに適用される解明の問題のテストケースになるものである。（中略）すなわち、このような詩的意味作用の中核において含意されているものについて十分な解明がなされるなら同じ解明を詩編全体のような、もっと広範な本質体にまで拡大できるはずである。

日付	比喩文章	本義の分類	表現の慣用性	隠義の分類	表現の種類
[1] 4月23日	蓬が下の土となり給ふ（死ぬこと）	人間		自然（土）	換喩
[2] 23日	膚は火にさはるがごとく（熱）	人間	○	自然	直喩
[3] 23日	魂を消す（驚くこと）	人間	○	自然（火）	換喩
[4] 26日	空しき舟に乗れるがごとく（生命）	人間		無生物	直喩
[5] 29日	汐の時の直るを便りに	人間		自然	換喩

	(痛みが一時的に治まること)				
[6]29日	盲亀のうき木にあくりしも是にいかで増るべき(嬉しさ)	人間		動物	直喩
[7]5月1日	麦は穂のいそがはしげにそよぎ (麦に風)	植物		人間	活喩
[8]3日	迅頓はおのれが上にては薬も得とゞかざる(これ以上の医療ができないこと)	人間		無生物	換喩
[9]3日	手を空うして(何もできないこと)	人間	○	人間	提喩
[10]3日	玉の緒(人の命)	人間	○	無生物	換喩
[11]3日	日は暮際にうすゞく比 訂正則 (夕日)	自然		無生物	提喩
[12]3日	駕 (医師)	人間	○	無生物	換喩
[13]3日	此世の人とは見えず (ようやく死ぬこと)	人間		人間	提喩 (緩叙法)
[14]3日	たのむべき綱もきれて (希望がなくなること)	人間		無生物	換喩
[15]4日	時鳥の初声をり得顔に呂る	動物		人間	活喩
[16]4日	心を空にして(集中すること)	人間		人間	提喩
[17]4日	時鳥・・・気相のよき日也	動物		人間	活喩
[18]4日	猛き虎も親はくらはず	動物	△	人間	活喩
[19]4日	烏も五十日親を養ひ返す	動物	△	人間	活喩
[20]6日	心火をもやし(いらいらすること)	人間		無生物	換喩
[21]6日	痩骨(貧弱な姿)	人間	○	無生物	提喩
[22]6日	夏の消やらぬ不二の雪より厚く・・・ 父の恩	人間		自然	直喩
[23]6日	紅なの一入より深き父の恩	人間		無生物	直喩
[24]6日	只うかめる雲のごとく東にあるかと思へば西にさすらひ	人間	○	自然	直喩
[25]6日	坂上に輪をゝろがすごとく今とし廿五年になりぬ	人生の中の時間		無生物	直喩
[26]6日	首は日輝をいたゞく	人間	○	自然	提喩+換喩
[27]6日	草まり、土はりて (農民の生活をすること)	人間		人間	提喩
[28]7日	御廣刈しなの、不自由	人間		人間	提喩(枕詞)
[29]8日	他の一寸のゆがみはとがめて おのれが一	人間		無生物	換喩

	尺のひがみはなえず				
[30]8日	なよ竹の直なる道に入るよしもがな	人間	△	植物	換喩 (枕詞)
[31]10日	時鳥の二声一声もゝよなゝ時得顔	動物		人間	活喩
[32]10日	天をかけり地を潜りてなりとも (一生懸命探すこと)	人間	○	人間	換喩
[33]10日	足を先にしてかけ巡る (あわててかけ巡る)	人間		自然	換喩
[34]10日	白雲のよすがもなき根なし	人間		自然	換喩 (枕詞)
[35]11日	鏡の形をうつすよりも明かも (一茶の未来)	人間		無生物	直喩
[36]11日	足なえ　こしかゞまりて (年を取ること)	人間	○	人間	提喩
[37]11日	犬猫よりも浅ましく	人間	○	動物	直喩
[38]11日	草葉の陰にても (墓にて)	人間	○	自然	提喩
[39]13日	耳をそばだて聞居たりし	人間	○	無生物	換喩
[40]13日	渡りに舟得しやうに (待ち望んでいたものが手に入った)	人間	○	無生物	直喩
[41]13日	鯨の海を吸ふがごとく (酒を飲むこと)	人間		動物	直喩
[42]13日	手に汗をにぎる (悔しく思うこと)	人間	○	人間	提喩
[43]14日	火をもて薪をさかんにするごとく (酒をもて病を増長する)	人間		無生物	直喩
[44]15日	財布の辺り (鼻のあたり)	人間		無生物	換喩
[45]15日	蟷螂が斧ふるがごとく (不益の論)	人間	○	動物	直喩
[46]18日	我心石木にしも (無情であること)	人間		自然	換喩
[47]18日	髪の毛は針を立たるごとく	人間		無生物	直喩
[48]18日	犬蛇ともなるべき	人間		動物	換喩
[49]19日	木の仏を横になしたるごとく	人間		無生物	直喩
[50]20日	痰はころ／／と公卿を責メ	無生物		人間	活喩
[51]20日	玉の緒　(人生)	人間	○	無生物	換喩
[52]20日	手を先しくして (諦めること)	人間	○	人間	提喩
[53]20日	闇に灯をうしなくる心ちして	人間	△	無生物	直喩
[54]20日	無常の春の花	植物		人間	換喩
[55]20日	花は風にさそはれて	自然		人間	活喩

[56]20日	一時の水の泡と消給ふ（自分の努力）	人間	○	無生物	換喩
[57]21日	日は片壁に横たはり（日が傾くこと）	自然		無生物	提喩
[58]21日	夕べを呂山鳥	動物		人間	活喩
[59]21日	無常の声の人相　（人相の鐘）	無生物		人間	活喩
[60]21日	鐘をうらみ（朝を待ちわびること）	人間		無生物	提喩
[61]21日	鶏をのゝしりて（朝を待ちわびること）	人間		動物	提喩
[62]21日	胸もふさがり （悲しさで胸が苦しくなること）	人間	○	無生物	換喩
[63]21日	魂つぶれて （悲しさに負ける気持ち）	人間		無生物	換喩
[64]22日	一寸の孝を尽さんとすれば直に一尺の魔のそねみにあひ	人間	△	無生物	換喩
[65]22日	小鹿の角のつかの間も家の治る時しなかりき	人間	△	動物	換喩（枕詞）
[66]22日	念々不住猶霜兄 （住まいが定まらないこと）	人間	△	自然	換喩
[67]22日	頭に霜をいただゝく（年をとること）	人間	○	自然	換喩＋提喩
[68]22日	はゝき木のあるにもあらぬ山のおく	自然		自然	提喩（枕詞）
[69]22日	むもれ木の道しらぬ里	人間		植物	提喩（枕詞）
[70]22日	ゆかりの綱（親子の縁）	人間		無生物	換詞
[71]22日	夏せみの音をのみなきて	人間		動物	換喩
[72]22日	山吹のいはぬ色なるかなしび	人間		植物	換喩（枕詞）
[73]23日	キドアイ楽　あざなくる縄のごとく	人間	○	無生物	直喩
[74]23日	水の泡よりもあはく	人間		無生物	直喩
[75]23日	風の前のちりよりもかろき	人間	○	無生物	直喩
[76]23日	きれがたきは玉の緒（人の命）	人間	○	無生物	換喩
[77]23日	行水ふたゝびかくらず	人間		無生物	換喩
[78]23日	石の火の石にかくらず	人間		無生物	換喩
[79]23日	しらぬ国くひとり放逸れしごとく （支えがないこと）	人間		人間	直喩
[80]28日	雲水と成て （居所を定めずに巡り歩くこと）	人間	○	自然	換喩
[81]28日	悪しき石ながらも打ねば火を生ぜず （問題を話さずに解決ができないこと）	人間		無生物	換喩

28日[82]	破れたる鐘をたゝけばひゞく (間違っている相手も話が通じるという)	人間		無生物	換喩

⑧ ⑱ ❹

❻ ❻ ❻ ❻ ❻ ❻ ❻ ❻ ❻ ❻

今迄は父をたのみに古郷へは来つれ、今より後は誰を力にながらふべき。心引さるゝ妻子もなく、するすみの、水の泡よりもあはく、風の前のちりよりもかろき身一つの境涯なれど、只きれがたきは玉の緒なりき（別表の74、75、76、五月二十三日）

（信州）の寺子屋業数は寛政末までに七十九を数えているが、これを「日本教育史資料」所載の寛政末までの全国寺子屋業数五百に比べてみると十五・八％になる。全国の約六分の一である（中略）信州の寺子屋で一番あだっていることは、その数が非常に多く一般に普及していることである。

また、一茶の出身地である上水内郡では、寛政末の寺子屋師匠の半分以上が農民の出であり、宗教家や武士は少なかったと述べている。信州人の学問水準の高さに関して、江戸時代中期頃から信州で大流行していた俳諧の普及も、もう一つの原因として指摘しなければならない。

おそらく俳諧ぐらい広く庶民に親しまれた文芸はないであろう。至る所の

寺や宮にかかげられている俳句の額は、今でも相当数を上っている。そしてそこに名をつらねている俳人たちの多くは、手に鍬をとって田の畔に句をひねっていた人々である。なおこの額に、名を連ねた俳人の外に、名を連ねられなかった無数の俳人がいたわけである。だから少し読み書きのできる人は、皆俳句を作っていたといってもよいくらいであった。

[illegible]

実に仏法は出家より俗家の法、風雅も二五隠者のせまき遊風の道にあらず、諸人が心のやり所となすべきにな。（10）

[illegible]　五月十二日の文章（別表の40、41）に次のような表現がみられる。

病人は渡りに舟得しやうに、日比の望たりぬ顔して呑る〻程に、鯨の海を吸ふがごとく、朝の間に五合ばかりかたぶけ給ふ

[illegible]　五月十二日の文章（別表の67）に、

我も頭に霜をいただく迄、あるとある山々浦々を宿として日をおくる

[illegible]

かな釘のやうな手足を秋の風　　『志多良』

[illegible]

① 我心岩木にしも、たとへ亡迹たりとも、何かは変じ申べきか（46、五月十八日）

② 木の仏を横になしたるごとく、すや　と眠り給ふばかり（49、五月十九日）

①「我心岩木にしも」

②「木の仏を横になしたるごとく、すや　と眠り給ふばかり」

Ⓩ Ⓨ

古郷にもどりたらんは、家のうからやからは、さみつることよと、犬猫よりも浅ましくさ

げすみの〻しられんたらん（37、五月十一日）

火をもて薪をさかんにすることく、熱に酒もて病を増長さするよりはまさりぬべき。（43、五月十四日）

[illegible]

この終焉記が、父の遺産分配に関する遺言の文章的証拠として書かれたとすれば、性格化された作者自身までが作中に登場して、みずから有利な証言をすることが最も効果的な方法であった。

[illegible]

美しいものばかりを描くのではなく、暗い酷悪なものまでも積極的に掘り下げて、人間、社会の真相に迫ろうとしたのは、一九世紀末、フランスを中心に起こった自然主義文学であるが、大げさにいえば一茶の文学的姿勢にはこれに近いものがあった。

[illegible]といえるかもしれない。[illegible]自然主義小説の創立者といわれている[illegible]

自然主義は、専ら実験的方法の中、即ち文学に適用された観察と実験の中にある。従って修辞学はこの場合暫くは見る必要がない。先づ共同なるべき方法を確立しよう、

[illegible]

時代	発句数	擬物法を使用した発句数	百分率
寛政	十五	一	約八%
享和	十二	二	約十八%
文化期	三十九	十	約二十八%

（六年まで）			
文化後期（七年から）	百二十二	三十六	約二十九%
文政	五十三	二十四	約四十五%

花げしのふはつくやうな前歯哉　　『七番日記』

蝶とんで我身も塵のたぐひ哉　　『七番日記』

母親を霜よけにして寝た子哉　　『八番日記』

Ⓩ

Ⓨ

・・・心のうち一点の塵もなく、名月のきら〳〵しく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、なか〳〵心の皺を伸しぬ。

又、人の来りて、「わん〳〵はどこに。」といへば、犬に指し、「かあ〳〵は。」と問へば、烏にゆびさすさま、口もとより爪先迄、愛嬌こぼれてあいらしく、いはゞ春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覚え侍る。

此(この)をさな、仏の守りし給ひけん、逮夜の夕暮に、持仏堂に　燭てらして打ならせば、どこに居てもいそがはしく這よりて、さわらびのちひさき手を合せて、「なんむ〳〵。」と唱ふ声、しをらしく、ゆかしく、なつかしく、殊勝也。

一茶は動植物はもちろん土や石ころに至るまであらゆる存在に仏性を認

ある世界観を持っていた。

といわれており、また、堀切実氏はこれを受けて、一茶晩年の姿を

かつて〝我執〟に充ちていたはずの一茶は、「天地大戯場」のなかの小さな一存在である己れを自覚し、己れ以外のものとの境界をとっ払い、さらには、天地自然のなかのすべての生物・無生物の存在と己れとを同化しようとしていたのであった。（16）

オード渓谷の方言では、川を無生物ではなく、人間のように扱うことになっていた。人は、オード川に対してほとんど定冠詞を使うことがなかった。〝オードに会いに行く〟と言い、〝オードが高くなった〟と、〝オードが唸っている〟などといった表現を使っていた。

結局、川の名称の前に定冠詞一つを加えるには、まず思考様式全体を変える必要があった。（マブソン訳）

«Le Pierre»　«La Marie»

ブルターニュの言葉は（現在に至っても）精彩に富んだ比喩表現に溢れていた（中略）。うぬぼれた人は、〝船の帆のようにふくらんでいる〟と言い、あちこちから借金して暮らす人は〝釘で生活している〟と言い、または、状況に応じてそれぞれの相手にいつも違うことを飾って言う人について、〝彼は笛を作る木で出来ている〟と言ったりするのであった。（マブソン訳）

註

（１）矢羽勝幸『父の終焉日記・おらが春・他一篇』（岩波文庫・平成４）
前田利治『一茶自筆『父の終焉日記・浅黄空・俳諧寸抄録』』（勉誠社・昭和５１）

（２）堀切実「一茶の比喩表現」（『表現としての俳諧』、ぺりかん社・昭和６３）

（３）Paul Ricœur, *La métaphore vive*, Éditions du Seuil, Paris, 1975 。日本語版 ポール・リクール著久米博訳『生きた隠喩』（岩波現代選書・昭和５９）ｐ・２０３

（４）たとえば、別表の８０番（五月二十八日）、「雲水と成て」という表現を慣用的なものとみなしたのである。『時代別国語大辞典室町時代編』で調べてみると、二つの意味が載っている。まず、「雲と水と。」という意味には二つの用例が揚げられている。また、「行雲流水のように所定めず歩きめぐること。転じて、行脚僧。」という意味には他に二つの用例が揚げられている。『国語大辞典』や『角川古語大辞典』には、『海道記』（萱津より矢矧）の次の用例が引用されている。「西空は溟海、漫々として雲水蒼々たり」。『海道記』の影響が『寛政三年帰郷日記』に明らかであることから、一茶はこの用例を承知していたと考えられるのであろう（遠藤誠治の論文「「寛政三年帰郷日記」について ー 「海道記」との関連を中心に」『一茶の総合研究』を参照）。「行脚」の意に関しては、『父の終焉日記』執筆直前に刊行された『東海道中膝栗毛』（三・上）にみる「東西に走り南北に遊行する、雲水のたのしみえもいはれず」という用例がとくに著名である。

それに対して、別表の８１番や８２番にみる表現は、辞典、参考書、名作品などに用例がない。『国語大辞典』は「石の火」を「人生のはかなさ」の比喩として認めているが、理解のない話し相手を「悪しき石」にたとえるような前例が見つからない。同じく、８２番の「破れた

る鐘」という比喩表現は、どこにも用例が見つからず、慣用的でないと判断したのである。

（５）本稿は、一茶の発句と俳文の比喩的レトリックの比較を目的とするものではなく、一茶の表現意識における比喩の多用を問題にしているからである。

（６）橋爪豊「川柳の比喩ー比喩の時代性」『文法』１１ー１１（昭和４４、１２）

（７）中村明『比喩表現の理論と分類』（国立国語研究所編・秀英出版・昭和５２）Ｐ・４９

（８）丸山一彦氏の注釈によると（『父の終焉日記・享政二年紀行』角川文庫・昭和３７）、表の１、３、４、５、６、１５、１８、１９、２０、２２、２４、２５、２８、３０、３１、３３、３４、４０、４１、４３、４５、４６、４８、４９、５３、５４、５５、５６、５９、６０、６１、６５、６６、６８、６９、７１、７２、７４、７５、７７、７８が引用に基づく表現である。合計四十一箇所。

（９）土屋弼太郎『近世信濃文化史』（信濃教育会出版部・昭和３７）Ｐ・１６５～１７０を参照。

（１０）『一茶大事典』矢羽勝幸編著『芭蕉別稿』「あるがまま芭蕉会」（大修館書店・平成５）Ｐ・４１１、４１２による。

（１１）黄色瑞華「『父の終焉日記』の人物構想」矢羽勝幸編集『一茶の総合研究』（信濃毎日新聞社・昭和６２）Ｐ・３１５

（１２）注（１）の書の解説Ｐ・３０９による。

（１３）エミール・ゾラ著　河内清訳『実験小説論』（白水社・昭和１４）

（１４）注（１）の書所収『おらが春』本文Ｐ・１５９、１６０による。

（１５）徳武孝「一茶の世界観　ー　詩と俳句の接近」『長野』一七五号

（１６）堀切実氏「小林一茶　ー　その詩人像の推移」、『国文学、解釈と鑑賞』８２８号

（１７）ウジェン・ヴェバー　、ベルナル・ジェニエズ、アントワヌ・ベルマン共著　『風土の臨終　ー　フランスにおける農村の近代化』（リブレリー　アルテーム　ファヤル、パリ・１９８３年）

La fin des terroirs - La modernisation de la France rurale, 1870-1914,

Eugen J. Weber, Bernard Géniès, Antoine Berman, Librairie Arthème Fayard (Éditions Recherches), Paris, 1983 を参照。

（英語版 Stanford University Press, Stanford, California, 1976, Board of Trustees of the Leland Stanford Junior University)

p.143: «Dans le patois local [de l'Aude], la rivière n'était pas traitée comme un objet, mais comme une personne. On n'employait pratiquement jamais l'article défini à son propos : on allait à Aude, on disait qu'Aude était haute, qu'Aude grognait, et ainsi de suite.

Il fallut un changement de mentalité total pour qu'on ajoute un petit article au nom de la rivière»

同、p.604: «Le parler breton était (et reste) rempli de métaphores pittoresques: (...) un homme bouffi d'orgueil est

“gonflé comme la voile d’un navire” et celui qui vit d’expédients “vit de ses clous”. De l’homme qui est d’accord avec tout le monde, qui adapte sa chanson à toutes les situations, on dit qu’”il est du bois dont les flûtes sont faites”.»